

『琥珀色のなみだ 番外編 ～めでたし、めでたし。～』

著：成瀬かの

ill：yoco

「めでたし、めでたし。」

『——琥珀』

ふわふわ。ふわふわ。

濃く薄く山肌に掛かる朝霧のように、琥珀は空を漂う。

『琥珀、そこにいるのか？』

最初の頃は、琥珀が琥珀となる前——単なる気であった頃に戻ったかのように酷く稀薄で、意識すらなく、ただ荒れ果てた禁足地や血の匂いの残る山里を覆っているだけだったけれど、時々寒い夜に軀の上に掛けた着物を引き寄せるようにきゅっと引っ張られる感覚があって、琥珀はほんの僅かずつではあったが濃くなっていった。

かそけき朝霧から山羊の乳のような濃霧へ。

濃くなるにつれて琥珀は己が何者かを思い出し、それから無私の愛を注いでくれた人がいた事を思い出し、何が起こったかも思い出した。

『頼む、返事をしてくれ琥珀——』

またきゅっと何かが琥珀を引っ張り凝縮させる。

ああ、そうか。名前を呼んでくれる人がいるからだ。

名前は呪。

特に帰ってきてほしいという望みを込めて呼ぶ声は琥珀を縛り、従来の狐神のように散る事を許さない。琥珀に力を与え元通り狐耳と尻尾のある神様の姿を取り戻させようとする。

『琥珀』

一年、二年、三年、四年。

時は緩慢に過ぎていった。

十年経ってようやくかつてとほぼ同じ形にまで凝縮すると、琥珀はふわふわ、ふわふわ。鐵の後をついて歩き始める。

山間の夏は短い。稲刈りが終わればすぐ秋がやってくる。

秋と言えば、祭りだ。

一人になってから鐵は社に舞を奉納するばかりでなく、祭りの支度も手伝うようになっていた。足繁く山里へ降りる鐵に、人型を取れるようになった琥珀もふんふんと調子外れの鼻歌を歌いながら踊るような足取りでついてゆく。まだ琥珀の姿は見えないけれど構わない。琥珀は鐵と一緒にいられるだけで楽しいのだ。

この日も鐵は打ち合わせの為に月白の屋敷を訪ねていた。気持ちのいい風が吹き抜ける縁側に通された鐵の隣に琥珀もちょこんと座ると、嫁らしくぴとりと身を寄せ、無駄のない筋肉に覆われた鐵の左腕を両手で抱える。

「いつも済まん。おぬしはこの里の生まれではないのに」

鐵の前に白湯を置くと、月白も腕を挟んだ向かいにどかりと腰を下ろした。

空は抜けるような秋晴れで、まだ緑の紅葉が落とす影が清々しい。

「気にするな。里人には何かと世話になっている」

「だが、一々里に下りてくるのも大変であろう？」

「構わん」

無骨な手が腕を掴み、口元へと運ぶ。

「むしろ、手伝わせてくれるとありがたい。どうにも手持ち無沙汰なのだ。琥珀が来る前はそれなりに忙しくしていた記憶があるのに、どうやって暇を潰したらいいのか皆目わからん。それにこの時期はやたらと琥珀の事が思い出される。独りで山にいと、気が触れそうになるほどに」

「鐵……」

月白が鐵から目を逸らす。

琥珀は鐵の腕を抱く手に力を込めた。

そういえば琥珀が鐵に嫁にしてとねだったのがちょうどこの時期だった。一生仲良しでいるのだと指切りげんまんして夫婦なのだからと同じ褥でぬくもりを分け合って……平穏な日々の如何に幸せだった事だろう。

胸がちくちく痛む。

切なくて。鐵が愛おしくて。

胸がどうにかなってしまいやしないかと片手を当てたら、首から下がっていた鈴にぶつかってちりっと小さな音を立てた。

その刹那、鐵の頭が天敵を見つけた獣のような素早さで回転した。

最短距離で鈴を捕捉してのけた鐵に、琥珀は驚き凍り付く。

もしかして、見えているの……？

「どうした」

急に黙り込んだばかりか全身を緊張させ耳をそばだてている鐵に、驚き問うた月白への応えは短かった。

「鈴の音が」

「鈴？ おまえが琥珀の首に掛けてやった鈴か？ それか？」

「今、聞こえなかったか？」

「皆目」

「……そうか」

ふっと鐵が緊張を解く。改めて白湯で喉を潤し息を吐いた鐵に釣られるように琥珀も溜息をつく。音を立てないようにそっと赤い紐の先の鈴を握り込んだ。

今のは何だったんだろう。

鐵にこの鈴の音が聞こえた？

琥珀の声は聞こえないのに鈴の音だけ届くなど不思議でしかないが、鐵は視線で場所まで当てていた。

もしかしたら鐵がくれたものだからかもしれない。

そもそも琥珀と違って山々の清浄な気が凝って出来た存在ではないこの鈴が、帝の手の者に斬られて散った自分と今も共にあるのからしておかしい。この鈴は摂理を超越した特別な存在なのかもしれない。

自分の声が聞こえないのは淋しいけれど、これで鐵がいつも自分が傍にいる事に気付いてくれたらいいなあと、琥珀は鐵の肩に頭をぐりぐりする。

「鐵」

「む？」

「その……大丈夫か？」

一方、本当に琥珀が此処にいると知らない月白の表情は暗い。

琥珀は身を乗り出して、鐵の代わりに返事をしてあげた。

『大丈夫だよ。月白にも鈴の音が聞こえたらよかったのに』

青い空をちぎれ雲が流れてゆく。

+ + +

ちりちりと鈴が鳴る。その度に鐵が振り向いてくれるのが琥珀は嬉しくてたまらない。視線を向けられると何もかもが元通りになったような気さえする。琥珀にちゃんと肉体があって、事あるごとに鐵に抱き締めて貰えた頃に。

月白は反対に、鐵がふと動きを止めあらぬ方へ視線をやる度に気遣わしげな顔をするようになった。鐵が琥珀恋しさにおかしくなったと思っているのだ。この十年、頑なに独り身を貫いているこの無骨な武士がいまだ狐神の帰りを待っているのは知らぬ人とてない事実ではあるけれど。

『月白、心配しないで。琥珀はちゃんと此処にいるよ？ ころは別に幻を見ている訳じゃない

よ?』

袖を引っ張って言うても、月白は琥珀に気付かない。

+ + +

その日、鐵は里の女衆と共に月白の屋敷に集まり、祭りの時に身に着ける袍や指貫を広げていた。もし虫や鼠に齧られていたら繕わなければならないからだが、見たところ冠や履物も無事のようにだ。

『よかったあ。これで今年もくろの舞を見られるね?』

琥珀は着るものの事はよくわからんと女たちに任せ縁側に胡座を掻いた鐵の隣に膝を突く。その拍子に鈴が鳴り、鐵が弾かれたように横を向いた。

「どうしたんだい、鐵様」

空を見つめる鐵に女衆が気が付く。

「……うむ、今、琥珀の鈴の音が聞こえなかったか?」

「鈴の音?」

女衆は顔を見合わせた。

「ちりんちりんっていうあれかい?」

「あんた、聞こえた?」

「ううん」

「あたしも聞こえなかったねえ」

「……そうか」

心配そうな眼差しが女たちへも伝染する。

+ + +

祭りが行われる予定の境内は長い石段を登っていかねばならない事もあり、普段は子供たちでさえ足を向けない。参道以外は草木が生い茂っているので、毎年祭りの前に里人総出で刈ったり払ったりする。

鐵も里人たちと共に働く気で来たものの、舞手は特別扱いらしい。月白に仰せつかった役目は社の煤払いだった。

琥珀は鐵が行く所になら何処までだつてついてゆく。鐵に倣って戸外が明るいだけに暗く感じられる社に入り、手伝おうとしたが、鐵が笹で埃を払い始めると、くしゅんくしゅん、くしゃみが出て止まらなくなってしまった。

堪らず外に出て、眩しい陽射しに目を細め——琥珀は月白が女衆の一部に捕まっているのに気付く。

「ねえ、月白様。鐵様、ちょっと様子がおかしくないかい？」

琥珀の耳がぴんと立つ。

——くろにおかしい所なんて一つもないよ？ 何でそんな酷い事を言うの？

尻尾を膨らませた琥珀はずかずか歩み寄ると、しゃがみ込んで堂々と女衆と月白の内緒話を盗み聞き始めた。

「皆も気付いたか。どうやら狐神様の鈴の音が聞こえるらしい」

声を潜め沈痛な面持ちで応える月白に、三人の女衆も顔を曇らせる。

「装束を検めた時だけじゃなかったのかい？」

「お可哀想に。鐵様、まだ狐神様の事が忘れられないんだよ」

「めんこい子だったもの。くろ、くろって何処に行くにも付いて歩いて」

「あの年食べた桃のおいしさは忘れられないねえ」

別に何も無い所を見つめていたっていいと琥珀は思うのだが、そうはいかないらしい。

仕方がない、人がいる所では鈴を鳴らさないようにしようかと考えていた時だった。

「でも、もう十年も経つんだよ？ このままでいいわけないよ」

女衆の一人が言った一言がするりと琥珀の胸に滑り込み、不安という名の澱を舞い上がらせた。

このままでは、よくない？

「きっと、あんな山奥に独りでいるのがいけないんだよ」

「そうか、嫁を取ればいいんだ！」

琥珀はぱかんと口を開いた。

何を言い出すのだろう、この人たちは。

嫁はいる。琥珀だ！

だが、女衆は一気に盛り上がった。

「確かに嫁がいれば、過ぎた事をくよくよ考える暇なんかなくなるものね」

「でも、誰が嫁になるんだい？」

「ああ、もう十年早ければ、あたしが慰めてあげられたのに」

興奮した女衆の声が大きくなる。そうしたら近くで真面目に作業していた女たちまで手を止めて、話に加わり始めた。

「あたしあたし！ あたしが嫁入りするよっ」

「何だい、あんたには勘吉つつあんがいるだろう」

「鐵様が貰ってくれるって言うんなら、あんなひょうろく玉は家からおん出すさ」

「だったらあたしも！」

きゃあっと若い娘のようにしゃぐ女衆に我慢出来なくなってきたのだろう。それまでしゃがみ込んで黙々と作業をしていた若い娘がいきなり立ち上がった。

「あんなに優しい勘吉さんをおん出そうだななんて、何を馬鹿な事を言ってんですかっ」

年の頃は十五、六だろうか。如何にも生真面目そうな娘は色白でくっきりとした目鼻立ちを持つなかなかの器量よしで、山里では一際垢抜けた空気を纏っていた。それもその筈、この娘は父親を亡くし祖父に引き取られてこの山里にやってきた半年前まで町で暮らしていたのだ。

「ああも小汚い男の嫁になりたいと思うなんて、信じられない」

確かに今の鐵の髪はわさわさで、髭もじょりじょりしていて、直垂ときたらいつ洗ったかわからない程汚い。でも、本当の鐵はとっても男前で凛々しいのにと、琥珀は拳を握り締める。

怒鳴られて鼻白んだ女衆も変な顔をした。

「あんれ、あんた、知らないのかい？」

「そりゃそうさ。この子は余所から来たばかりでまだ鐵様の舞を見た事がないんだ」

「あのねえ、ちよ。鐵様はね——」

説明してやろうとする親切な女の口を別の女が塞いだ。

「およしよ。知らぬが仏だよ。わざわざ教えて敵を増やす事はないよ」

『あ』

「それもそうだね」

ふふん、と見下すような笑みを浮かべた女衆が散ってゆく。その場に取り残されたちよは眉間に皺を寄せた。

「……何なのよ、一体」

琥珀はたったか走って社へ戻ると、男衆と何やら話していた鐵の周りをぐるぐる回って訴えた。

『くろ、くろ、気を付けて。女衆がくろの嫁の座を狙ってるよ。くろの嫁は琥珀なのに……』

琥珀が早くも半泣きになっているというのに、鐵は目もくれない。鈴が鳴らなければ、鐵には琥珀が此処にいる事すらわからないのだ。

『くろ……』

何だか哀しくなってしまった琥珀は赤い紐を掴むと乱暴に振った。りん、という音に鐵が素早く視線を走らせる。でも、その瞳は琥珀を映さない。

「琥珀、いるのか？」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<https://www.fwinc.jp/daria/>